

彭曉の煉丹理論

——五行の変化に着目して——

江波戸 互

はじめに

五代・後蜀の人である彭曉（號は真一子）は、『周易參同契』（以下、『參同契』）注釈である『周易參同契分章通真義』（以下、『通真義』）と、『還丹内象金鑰匙』（以下、『金鑰匙』）の二書を著したことで広く知られる。特に『通真義』は、現存最古の『參同契』注釈として、また『參同契』そのものの出自に関する貴重な手がかりとして、古くから注目されてきた。

彭曉とその著作に関して、まとまった分量を持つ先行研究としては、欽偉剛氏のもの¹と丁貽庄氏のもの²の二点が挙げられよう。欽偉剛氏は、南宋における『參同契』テキストの状況を説明する過程で、書誌学的な観点から『通真義』に注目し、『通真義』が成書してから世に出回るまでに約二〇〇年の空白が存在したという重要な指摘を行った³。また、丁貽庄氏は、『通真義』と『金鑰匙』の検討を通

じて、彭曉の煉丹理論の考察を行い、いくつかの注目すべき思想的特徴を明らかにした⁴が、残念ながらこれはいわば断片的な分析であり、理論の全体像を明らかにするには至っていない。管見の限り、彭曉の煉丹理論全体の骨格を整合的に示すことに成功した研究は、未だに存在していない。このような研究状況は、この種の文献、すなわち『參同契』をその嚆矢とする抽象的・理論的な煉丹文献に特有の難解さが、その一因となっているように思われる。

彭曉は、一般に外丹から内丹への過渡期とされる、唐宋の間に活動していた人物である。実際、その著作を丁寧に通読してみれば分かるように、彼の思想は外丹とも内丹とも断じ難い、非常に興味深い思想である。彼の思想を継承する文献として、『古文龍虎經註疏』⁵と『紫陽真人悟真篇註疏』⁶の二書（いずれも南宋成書）を挙げることができる。『龍虎經註疏』の著者である王道は、『通真義』と『金鑰匙』を長く引用し、これによって自説を総括しており、また、『悟真篇註疏』所収の翁葆光注は、自説の根拠として彭曉の言説を度々

引用している。⁽⁸⁾周知の通り、『龍虎経』は『参同契』の前身とされる丹経であるし、『悟真篇』は『参同契』と並び称される内丹の聖典である。この二書の最も代表的な注釈である両註疏に、ともに彭曉の影響が色濃く見えているという事実は、彼の提唱した煉丹理論が、『参同契』注釈という枠に留まらない影響力を有していたことを物語っている。以上のことから、彭曉とその著作が持つ思想的意義は決して小さくないと筆者は考えるのである。

そこで本稿ではまず、『参同契』注釈の解説につきまとう難解さを如何にして克服すべきか、検討する。次いで、これを踏まえた上で、彭曉の思想を分析していき、その煉丹理論の全体像を明らかにすることを目指す。最後に、そこまでの議論を総括した上で、彼の思想の核心がどこにあるのか、改めて考えることとする。

一、いかにして『参同契』注釈を分析するか

『参同契』は、後漢・魏伯陽の作と伝えられ、陰陽五行思想と象数易理論に則って、丹葉の精製理論と火加減の調整とを説く文献である。しかし、意味深な比喻を用いた抽象的な言辞に加え、四言の文、五言の文、散文が入り交じり文体が全く不統一であったり、上下巻において文意の重複が多かったりと、その構成は混乱している。また、欽偉剛氏が指摘しているように、唐宋の煉丹文献においては、現行の『参同契』テキストが『龍虎経』『潜通訣』などとい

う書名で引用されている一方で、現行の『龍虎経』テキストが『参同契』として引用されている例がしばしば見られ、⁽⁹⁾そのテキストが流伝の過程で多くの変改を被ってきたであろうことが窺える。このように『参同契』とは、様々な意味で不安定な文献であると言わざるを得ない。

さて、『通真義』を初めとする『参同契』注釈の分析にあたって、まず第一に問題となるのが、文中で用いられる無数の比喻である。『参同契』及びその注釈に用いられている種々の比喻は、様々な分野（陰陽・五行・数字・方角・卦爻・五臟・五色・十干・外丹独自の術語など）の用語が、陰陽五行思想などを媒介として結合したことによって生じたものである。それゆえに、そこに含意される事象はあまりに多岐に渡っており、解釈の焦点を絞りがたく、どの比喻とどの比喻が対応しているのか、またその比喻が理論全体の中でどのような役割を果たしているのか、分別しがたいのである。

そこで本稿では、各種の比喻を全て五行という同一平面上に帰納することで、整理を試みた。なぜなら、これらの比喻には五行にまつわるものが少なくないことに加え、五行を軸とする比喻の体系は古くから比較的整備されていたため、これに依ることや或る程度の堅実な解釈が担保されるであろうと期待してのことである。また、後述するように彭曉は「五行顛倒」という思想を重視しているので、我々もまた五行の変化に着目することで、彼の煉丹理論を解しやすくするよう思われるからである。

第二の問題が、構成の混乱と、それに伴う解釈の多様化である。前述の通り『参同契』本文は全体の構成が混乱しており、その煉丹理論が順序立てて整然と述べられているわけではない。しかし、注釈者たちはそこに逐条的に注釈を行っていくため、必然的に注釈も断片的な記述になり易く、当該箇所が理論全体のどの部分を説いているのか解しがたいのである。さらに、前述の通り『参同契』は確固たるテキストが定まっておらず、また、その言辭が極めて抽象的であるために、各注釈者が掲げる『参同契』本文には文字の異同が無数に存在し⁽¹⁰⁾、その注釈においては様々な異なる『参同契』解釈がなされている。視点を変えれば、このように或る意味で懐が深い文献である故に多くの注釈が生み出されたとも言えるのだが、ともあれ各注釈間には、『参同契』本文を如何に分章するか、各種の比喻を如何に解釈するか、外丹・内丹いずれの立場を取るのか、といった様々な面で、看過できない重大な差異がある。つまり、基本的には「各『参同契』注釈はそれぞれ異なる理論体系を持っている」と見なさざるを得ず、それ故に我々は他の注釈の解釈を安易に援用することができないのである。

このような事情を踏まえて、本稿では、まず彭曉の著作全体（『通真義』と『金鑰匙』）を通覧した上で、同一の局面を描写していると思しき部分を抜き出し、それらを比較対照することでその理論の部分と全体とを相補的に確定していく。そして、最終的にはこれらを統合し、その煉丹理論の全体像を再構築する、このような方法を用い

ることとした。言い換えれば本稿は、彭曉の著作という限定された範囲における理論的整合性の最大化を目指した研究である。

二、彭曉の思想の基本的性格

まず本章では、理論的分析を行う下準備として、彭曉の思想の基本的性格を二点確認しておく。

(1) 鼎器に対する認識

鼎中における煉丹の過程は全て天地の運行の縮図である、と彭曉は考える。

鼎室の内部は、すなわち一つの天地である。生きとし生けるものは全てここに由って生じる。……つまり鼎の中における造化が、天地の運行と万物の生成とをはっきりと象徴していることがわかるのだ。

（鼎室中、乃自是一天地也。凡閔變動之物、莫不由之也。……則知一鼎中造化、一一明象天地運動、發生万類也。）

〔通真義〕一〇章注

このように、煉丹が行われる鼎の内部はそれ自体が天地であり、一つの小宇宙である。では、鼎器によって天地を表象するとは、一体何を意味しているのだろうか。

〔参同契〕本文の「天地位を設く」とは、「既濟鼎器」によつ

て乾坤を象ることである。(本文の)「易 其の中に行はる」とは、陰陽・坎離・符火がこの鼎の中を巡ることである。既済鼎器によって乾坤を象り、さらにその中に金母が安置されれば、天地人の三才が備わることとなる。

(天地設位者、以其既済鼎器法象乾坤也。易行乎其中者、乃陰陽坎離符火運行其中也。既鼎器法乾坤、復於其中安金母、以備天地人三才也。)

〔通真義〕七章注)

ここから、天地は乾坤という卦によって象られ、乾坤は「既済鼎器」という器具によって象られていることがわかる。これが具体的に何を指しているのか、これについては次のように述べられている。

水火既済とは、乾坤の象徴である。水は上部にあつて常に静である。無為にしてひそやかであり、観察してもとらえどころがない。火は下部にあつて常に運動している。十二辰のうちを巡り、その働きは決して止むことがない。

(水火既済、乾坤之謂也。水在上常靜、無為而処陰、不以察求也。火在下常動、運轉經歷十二辰内、其用不休也。)

〔通真義〕二二章注)

つまり、既済鼎器とは、上に水、下に火を設けた鼎器である。その構造を離下坎上の水火既済に擬え、既済鼎器と呼ぶわけである。この鼎器は天地たる乾坤を象っており、その内に陰陽・坎離が巡る。

さらに、人の象徴である「金母」をその内に安置することで、全体として天地人の三才を象っているという。

ところで、一部の内丹文献では、鼎や爐といった術語を人体の隠喩として捉えることで、本来外丹に用いる器具であったはずの鼎爐を、内丹の文脈で読み替えることが行われる。つまり、「鼎」の定義如何によって、人体の外部・内部どちらで煉丹が行われるのか、大きく変わってきてしまうわけである。しかし、幸い彭曉は、自身が想定している「鼎」が如何なるものであるのか、具体的な記述を残している。

鼎の周囲は一尺五寸、その直径は五寸である。……鼎の高さは一尺二寸であり、上部の水は八寸のところまで入っている。……その厚さは一寸一分である。……鼎は竈の内部につり下げられており、地面には接していない。これが「懸胎鼎」である。(鼎周圍一尺五寸、中虛五寸。……鼎通身長一尺二寸、上水入鼎八寸。……厚一寸一分。……鼎懸於竈中、不著地。懸胎鼎是也。)

〔通真義〕「鼎器歌」注)

また、寸法のみならず、その構造や形状についても複数の言及がある。

還丹を修める際には壇・爐・鼎・竈が必要である。その上下はくつついており、蓬萊山のような形である。「陰陽五行の気が」あまねく巡り、全体に行き渡れば、鼎の内部に更に神室金胎が生じる。

(凡修還丹有壇爐鼎竈。上下相接、如蓬壺之狀。周旋四通、鼎内復有神室金胎。)

〔通真義〕二二六章注)

金液還丹を修めるには、壇が必要である。壇の上には竈があり、竈の中には鼎があり、鼎の中には神室があり、神室には金水がある。神室は卵を象っており、金水もまた卵のように「固体液体が混然とした状態で」存在している。

(凡修金液還丹有壇、壇上有竈、竈中有鼎、鼎中有神室、神室中有金水也。神室象雞子、金水亦如之。)

〔通真義〕六四章注)

このように、丹薬の煉成に用いる鼎・爐・壇といった器具については、その寸法・形状・構造などが具体的に述べられている。さらに次のようにある。

「上部が」円形なのは天を象っており、「下部が」角形なのは地を象っている。その形は蓬萊山のようにであり、また人間の形のようにもある。三層構造になっているのは、「人体の」三丹田を象っている。

(円象天、方象地。状若蓬壺、亦如人之身形。三層、象三丹田也。)

〔通真義〕「鼎器歌」注)

先ほど、一部の内丹文献においては人体を鼎爐に擬えていることを述べたが、彭曉はそれとは逆に、鼎爐を人体に擬え、またその三層構造を三丹田に擬えている。ここから、彭曉における「鼎爐」は決して人体を意味するものではなく、実際の器具としての鼎爐であ

ることが確認できる。

(2) 「鉛」の特異性⁽¹⁾

『參同契』における煉丹は、「鉛」と「汞(ニミずがね、水銀)」の二物から成る。この二物は、煉丹においては普遍的に用いられる物質であり、それぞれ龍虎とも呼称される。大まかに述べてしまえば、鉛(ニ虎)と汞(ニ龍)を交わらせる、いわゆる「龍虎交媾」こそが『參同契』の煉丹の重要な目的である。『參同契』注釈者である彭曉も当然この大原則に従うが、その一方で、彼が述べる「鉛」には、種々の煉丹文献の中でも極めて特殊な地位が与えられている。

真鉛について。未だ天地が存在しない混沌よりも前、鉛が一を得て現れる。次いで天地・陰陽・五行・万物が次々に生じてくる。つまり、鉛は天地の父母であり、陰陽の本元なのだ。聖人はこの天地の父母の根を採って大薬の基礎とし、陰陽の純粹な精粹を集めて還丹⁽¹²⁾の素材とする。……天地陰陽よりも後に生じた諸物雑類(五金・八石・草汁・木灰・晨霜・夜露・雪漿・氷水・青鹽・白濁)を利用して還丹を作ることなど、決してできない。

(真鉛、未有天地混沌之前、鉛得一而相形。次則漸生天地陰陽五行万物衆類。故鉛是天地之父母、陰陽之本元。蓋聖人採天地父母之根而為大薬之基、聚陰陽純粹之精而為還丹之質。……若以有天地陰陽之後所産者、五金八石、草汁木灰、晨霜夜露、雪漿氷水、青鹽白濁、諸物雑類而為之者、不亦難乎。)

〔通真義〕二二五章注)

このように、彭曉の考える「鉛」とは、天地開闢の以前より存在し、万物生成の基点となる超越的な存在であって、所謂「道」に近いものであり、この「鉛」こそが、丹葉を作成する際の基礎となるのだという。一方、実際の金属としての鉛、つまり「五金八石」の一つとしての鉛は、天地や陰陽よりも後に生じた「諸物雜類」であるがゆえに、煉丹に用いてはならないという。同様の言説は、『金鑰匙』にも見える。

黒鉛水虎なるものは、天地妙化の根であり、形体を持たない気である。つまり玄妙真一の精であって、天地の母であり、陰陽の根であり、日月の宗であり、水火の本であり、五行の祖であり、三才の元である。……この真一の精を、聖人は「真鉛」とも呼ぶ。天地の根、万物の母というのがそれである。……この黒鉛は尋常の物質などではなく、玄天の神水であり、天地に先んじて生じた、万物生成の母である。真一の精であり、天地の根であるのだ。

（夫黒鉛水虎者、是天地妙化之根、無質而有氣也。乃玄妙真一之精、為天地之母、陰陽之根、日月之宗、水火之本、五行之祖、三才之元。……即是真一之精、聖人異号為真鉛、則天地之根、万物之母、是也。……黒鉛者非是常物、是玄天神水、生於天地之先、作衆物之母。此真一之精元、是天地之根。）

〔金鑰匙〕 黒鉛水虎論

（ここでは鉛の異称として、「真鉛」の他に、「黒鉛」「水虎」「玄天の

神水」「真一の精」といった術語が挙げられており、鉛が五行では「水」に配当されていることがわかる。

以上、その「鼎器」観と「鉛」観に着目して、彭曉の思想の基本的性格を確認した。実際のな鼎器を用いながらも、観念的な鉛をその根本に置く、これが彭曉の思想の特徴である。

三、彭曉の煉丹理論① — 鉛における五行の変化 —

ここからは、五行の変化に着目して、彭曉の煉丹理論の構造を分析していく。参考のため、五行と諸概念（上から、生数・十干・五色・五方）との一般的な対応を、以下に示しておく。

木…三・甲乙・青・東
火…二・丙丁・赤・南
土…五・戊己・黄・中央
金…四・庚申・白・西
水…一・壬癸・黒・北

まず、分析の足がかりとして、「鉛」における五行の変化を確認してみよう。

黒鉛は変質してその位を西方へと変じ、「白虎金胎」となる。

（黒鉛変質而寄位西方、為白虎金胎。）

〔通真義〕二四章注

「黒鉛」の「黒」とは、前掲の五色と五行の対応から考えると、五行の「水」を指示していることがわかる。また、「西方」「白虎」「金胎」とは、いずれも五行の「金」を指示しているであろう。つまり、「黒鉛」が「白虎金胎」へと変化するというこの記述は、五行で言い換えれば、鉛の性質が水から金へと変化することを意味しているわけである。

ちなみに、鉛は煉丹の過程の中で様々な名称で現れ、その呼称は多岐にわたっている。

〔參同契〕本文の「故に鉛外は黒にして、内に金華を懐く」とは、鉛は白金に変化する以前には、その内に混じているものがあるという意味である。外見は黒であってもその内には金華を潜めているのであって、これはあたかもぼろ布を被っているのに内には玉を抱えている狂人のようである。

（故鉛外黒、内懐金華者、謂鉛未化白金之前、混於礪内。外貌黒而内藏金華、猶被褐懷玉之狂夫也。）

〔通真義〕一三三章注

ここでも、鉛が黒から白へ変化する、つまり五行で言えば水から金へと変化することが述べられている。「内に金華を抱く」とは、文字通り黒鉛の内部に金華が存在するということではなく、黒鉛は金華へと変化する道理を内包している、といった意味なのだろう。

さて、五行を金へと変化させた鉛は、白虎金胎や金華と呼ばれることがわかった。この金胎については、以下のような記述がある。

鼎の中には、金母華池がある。これはまた金胎神室とも呼ばれる。

（鼎中有金母華池、亦謂之金胎神室。）

〔通真義〕二章注

ここからは、金胎（＝金華）は、金母・華池・神室などとも呼称されることが読み取れる。つまり白虎・金華・金胎・金母・神室・華池とは、全て同一の物を指す異称なのである。そして、その役割は次のように述べられている。

金とは太陰の玄精であって、万物を長養し、氣と質とを備えている。故に、金華と呼ぶのだ。

（金は太陰之玄精、能長養万物、有氣而有質。故号曰金華也。）

〔通真義〕六八章注

このように、金は属性としては陰であり、万物を健やかに育む力を持つているという。すなわち、金母・金胎という表現から容易に連想される通り、この鉛は子を産み養う母胎としての役割を担っているわけである。後述するように、煉丹の後半ではこの母胎の内部がその舞台となる。

四、彭曉の煉丹理論② — 五行顛倒とその意義 —

（1）龍虎における五行の逆行

前章では、「虎」（＝鉛）において「水↓金」という五行の変化が

起こることを確認した。それでは、一方の「龍」においてはどのような変化が起こるのであろうか。『通真義』の注序に、以下のよう
な記述がある。

水虎はその形を潜め、庚辛（ \parallel 金）に向かって西転（ \parallel 金）する。
火龍はその体を伏し、甲乙（ \parallel 木）を追って東進（ \parallel 木）する。

（水虎潜形、寄庚辛而西転。火龍伏体、逐甲乙以東旋。）

（『通真義』注序）

ここでは、虎が「水」から「金」へと変化する一方で、龍は「火」から「木」へと変換することが述べられている。この変化は五行相生にも五行相克にも該当しないものであるが、彭暁はその典拠として「太白真人歌」なる古歌を挙げる。

かの太白真人歌にいう。「五行はその法則を逆転させ、龍が火から生まれる。五行は順行せず、虎が水から生まれる。」

（如彼太白真人歌曰、五行顛倒術、龍從火裏出。五行不順行、虎向水中生。）

（『通真義』六八章注）

ここでは、変化前の「龍」「虎」の五行は明示されていないが、文脈から推せば、明らかに龍は木、虎は金であろう。つまり、ここでも「火 \downarrow 木」「水 \downarrow 金」という変化が述べられているわけだが、この太白真人歌によれば、これは五行の法則を逆転させたものであるという。すなわち、「木 \downarrow 火 \downarrow 土 \downarrow 金 \downarrow 水 \downarrow …」という五行の法則（五行相生）において、「木 \downarrow 火」「金 \downarrow 水」の二箇所がそれぞれ逆行しているわけである。なお、この太白真人歌は『金鑰匙』の冒頭で

も次のように引かれており、彭暁がその内容を非常に重要視していることが窺える。

歌にいう。「五行はその法則を逆転させ、龍が火から生まれる。五行は順行せず、虎が水から生まれる。」この肝要の言二十文字は、天地互用の道理を明かし、陰陽消長の道を明らかにするものである。

（歌曰、五行顛倒術、龍從火裏出、五行不順行、虎向水中生。此要言二十字、可謂泄天地互用之機、分陰陽反覆之道。）

（『金鑰匙』序）

以上、龍虎においては、五行相生の順列が逆行し、それぞれ「水 \downarrow 金」「火 \downarrow 木」という性質の変化が起こることがわかった。以下では、太白真人歌の語を借りて、この逆行変化を「五行顛倒」と呼称することにする。

五行相生…木 \downarrow 火 \downarrow 土 \downarrow 金 \downarrow 水 \downarrow …

五行顛倒…木 \uparrow 火 金 \uparrow 水

それでは、この「五行顛倒」にはどのような意味が与えられているのだろうか。この問題を明らかにするために、少し視点を変え、日月に関する彼の言説に着目して考察を進めていく。

(2) 日・月とその魂魄

彭曉は、日・月に対して特殊な地位を与えている。

日のシンボルは離卦☲。日は陽の内に陰を含む。砂中に真汞を有することを象徴する。陽は内に陰がなければ、自らその魂を輝かせることはできない。だから「雌火」と呼ばれ、陽中に陰を含むのである。日の中に烏がいるのがそれであって、卦としては南方に属し離女とされる。

(日象☲。日者、陽内含陰。象砂中有真汞也。陽无陰則不能自耀其魂。故名曰雌火、乃陽中含陰也。日中有烏、卦属南方、為離女也。)

〔通真義〕「明鏡図」日象

月のシンボルは坎卦☵。月は陰の内に陽を含む。鉛中に真銀を有することを象徴する。陰は内に陽がなければ、自らその魂を輝かせることはできない。だから「雄金」と呼ばれ、陰中に陽を含むのである。月の中に兎がいるのがそれであって、卦としては北方に属し坎男とされる。

(月象☵。月者、陰内含陽。象鉛中有真銀也。陰无陽則不能自營其魄。故名曰雄金、乃陰中含陽也。月中有兎、卦属北方、為坎男也。)

〔通真義〕「明鏡図」月象

ここでは、日は陽、月は陰といった単純な対応ではなく、日は「陽中陰」たる離卦☲、月は「陰中陽」たる坎卦☵として設定されている。そして、輝く太陽の表面に見える黒い「烏」、輝く月の表面に

見える「兎」に着目して、日を太陽たらしめている本質は実は内なる陰（＝「魂」）であり、月を太陰たらしめている本質は実は内なる陽（＝「魄」）であることが説かれる。⁽¹⁴⁾ 換言すれば、日月（坎離）は、陰陽相混じった二面性を備えたものとして定義されているわけである。

それでは、日月の本質、つまり日魂・月魄は、煉丹においてどのような役割を担っているのだろうか。

〔參同契〕本文の「魂魄の居る所、互ひに室宅を為す」とは、日魂と月魄とが金室の中で交わり合い、丹薬の根基となるということである。

(魂魄所居、互為室宅者、謂日魂月魄相拘於金室之中、為丹根基也。)

〔通真義〕六三章注

この記述によれば、日の本質である「日魂」と、月の本質である「月魄」は、「金室」の中で交わり合い、⁽¹⁵⁾ 丹薬の基礎となるという。この「金室」とは、前述の「金胎」「神室」などの異称であり、五行顛倒によってその性質を金へと変化させた鉛のことを指している。

また、日魂と月魄の交合については、以下の箇所も参考になるであろう。

最初は天地の母（＝鉛）を採って丹基とし、最後は日月の精を合して薬祖とする。

(始探天地之母將為丹基、終合日月之精用為薬祖。)

〔通真義〕六五章注

還丹を修めるには、日月の精華を採取して陰陽の靈氣を合する。

(修丹採日月之精華、合陰陽之靈氣。)

〔通真義〕九章注)

これらの記述は明らかに、先の「日魂と月魄が金室の中で交わり合う」という記述と同じ場面を描写している。ここでは、「日魂」「月魄」が「日月の精」「日月の精華」とも表現されており、これらの術語が日月の精粹を意味していることがわかる。

(3) 五行顛倒と日月の結合

以上の日月の性格を踏まえて、改めて五行顛倒について考えてみよう。

金虎と木龍は、東西(木・金)の魂魄である。坎男と離女は、

南北(火・水)の夫妻である。

(金虎木龍、乃東西之魂魄。坎男離女、是南北之夫妻。)

〔通真義〕四四章注)

前述の通り、「坎男」とは月を、「離女」とは日を指す表現であるので、後半部分では「水」月、「火」日という対応が示されていることになる。一方、前半部分では、「金虎」(月)魄、「木龍」(日)魂という対応が示されており、彭曉が以下のように日月と五行を関連づけていることがわかる。

日 火 / 日魂 木

月 水 / 月魄 金

また、日月と五行の結合に関して、さらに次のような記述がある。

「坎戊月精」について、月とは陰、戊とは陽を指すので、陰中に陽があるということである。これは水から金虎が生じること象徴している。「離己日光」について、日とは陽、己とは陰を指すので、陽中に陰があるということである。これは火から汞龍(木)が生じることを象徴している。

(坎戊月精者、月、陰也。戊、陽也、乃陰中有陽。象水中生金虎也。離己日光者、日、陽也。己、陰也、乃陽中有陰。象火中生汞龍也。)

〔通真義〕九章注)

ここでは、日月の構造(陽中陰・陰中陽)と五行顛倒とが明確に結びつけられ、次のような対応が示されている。⁽¹⁶⁾

「陰(月)の中に陽(月魄)が存在する」 || 「水中から金が生じる」

「陽(日)の中に陰(日魂)が存在する」 || 「火中から木が生じる」

「日魂」「月魄」とは、日月それぞれの精粹を指す術語であった。つまり、これらの対応からは、「金」が「水」の精粹であり、「木」が「火」の精粹であることが読み取れる。すなわち、五行顛倒とは、「五行相生の順列を逆行することによって、或るものからその精粹が抽出される過程」なのである。

なお、このような日月と五行の結合を媒介しているのは、実は八卦における坎卦・離卦である。『易』説卦伝によれば、陰中陽の構

造を持つ坎卦は、天体においては月の象徴であり、同時に五行においては水の象徴でもある。また、陽中陰の構造を持つ離卦は、日の象徴であると同時に火の象徴である。¹⁷⁾ 彭曉は坎離のこのような性質に着目し、日月(陰陽)と五行顛倒を結びつけたのであろう。

(4) 五行顛倒の意義

前節で確認したように、日月は陽中陰・陰中陽という陰陽入り交じった構造を持っており、それぞれの中心に備わっている陰陽こそが、日月を日月たらしめる精粹(日魂・月魄)であった。日月に関してはこのような構造が説かれるのみであり、これはいわば靜的な思想であって、煉丹における物質の「変化」を表現することには用いがない。一方、五行顛倒は、五行が逆行するという動的な思想であるが、それ単体のみでは、なぜ敢えて五行を逆行させるのかという疑問に対する理論的な根拠が薄弱である。しかし彭曉は、この二つの思想を結合することによって、「或るものからその精粹を抽出するプロセス」という、煉丹における重要な意義を五行顛倒に与えたのである。

先に示したように、彭曉は五行顛倒の典拠として、「太白真人歌」を挙げている。また、坎離と日月を関連づける発想も、早く『易』に見えるものであった。すなわち、これらの発想そのものは、彭曉の創見にかかるものではない。しかし、これらを結合することで陰陽・五行・天文・八卦を貫く変化の図式を確立し、これを煉丹理論

に應用したのは、管見の限り彭曉が最も早い。よって、「五行顛倒を用いて水火からその精粹たる金木を抽出する」という思想は、彭曉の煉丹理論における注目すべき特徴であると言えよう。¹⁸⁾

五、彭曉の煉丹理論③

— 金木の交合と煉丹の完成 —

それでは本論に戻って、煉丹の進行をさらに追っていこう。

(1) 金木の交合と、真汞の産出

次の段階では、五行顛倒によって生じた金と木とが交合する。

青龍(≡木)がその気を吐くと、白虎(≡金)がこれに応じてその精を吸い、両者の精気が含み合つて、精粹を生み出す。

(青龍既能吐氣、白虎因得吸精、精氣相含、共生純粹。)

〔通真義〕六九章注

青龍(≡木)と白虎(≡金)の気が神胎(≡金)に集い、これらが補い合うことで靈汞真人を産み出す。

(青龍七宿之氣与白虎七宿之氣合聚神胎、輔翼而生靈汞真人也。)

〔通真義〕「鼎器歌」注

五行顛倒によって生じた木と金が交合することで、「靈汞真人」が生じる。これこそが、煉丹における一つの山場である「龍虎交媾」

である。ここで注意すべきは、この交合が「神胎」の内部で行われているということであろう。神胎とは、母胎としての働きを持った金、すなわち「白虎金胎」の異称であった。つまり、龍虎の交わり
の舞台は虎自身の内部であり、青龍が白虎の中に入っていくことで
交媾がなされるのである。

では、白虎金胎の内に生じた「靈汞真人」は、いかなる性質を持つ
ているのだろうか。

（金胎の内の真汞は、火加減を誤ると飛散して失われてしまう。

（胎中真汞、被火候過差、飛走不住。）

〔通真義〕四四章注

「河上姪女」とは、真汞のことである。火に遭えばすぐに飛散
してしまい、鬼が隠れ龍が潜むがごとく、その行き先もわから
ない。もしこれを制御したいのであれば、黄芽を得てその母と
し、これによって「真汞を」養育して確保しなくてはならない。
黄芽とはつまり真鉛のことである。

（河上姪女者、真汞也。見火則飛騰、如鬼隱龍潛、莫知所往。或擬制之、
須得黄芽為母、養育而存也。黄芽、即真鉛也。）

〔通真義〕七二章注

このように、靈汞真人は、「真汞」「河上姪女」とも呼ばれる物質
であり、その性質は極めて不安定で、すぐに飛散して失われてしま
うという。この記述は、実際の水銀の性質、つまり沸点が非常に低

く、少しの加熱で気化してしまうという化学的性質に由来している
のだろう。そして、この不安定な「真汞」を保持するには、「黄芽」
または「真鉛」と呼ばれる物質が必要とされる。この真鉛について
は、次のような記述がある。

真鉛を得てこれを丹薬の根株としさえすれば、自ら真汞という
果実がさかんに生じる。

（但認得真鉛為薬根株、則自然繁生真汞果実。）

〔通真義〕八六章注

ここでは、真鉛が真汞という果実を実らせるための根であることが
説かれている。つまり、汞は鉛が無ければ得られない物質とされて
いるのであり、ここからも「鉛」の重要性が窺えよう。

（2）「土」による「水」の確保と、煉丹の完成

真汞を確保する役割を担う「黄芽」（＝真鉛）は、五行においては
「土」に配当されている。

土は水銀（＝真汞）を抑えつけ、その飛散を防ぐことができる。
だから四季（木・火・金・水）の最後には「土」を用いるのだ。

（土能竭水銀、乃得不飛走。則四季尾火行土候、是也。）

〔通真義〕三一章注

加熱が完了すれば、その成果は土徳に帰される。土は四季全体
を守り、水の飛散を防ぐので、水が去ってしまうことはなくな

る。

(火教既極、復帰功於土。土守四季、竭水不飛、故水不得行也。)

〔通真義〕七五章注)

この二つの言説は、どちらも同じ場面に関する描写であろう。そこでこれらを照らし合わせてみると、「水銀」(≡真汞)が五行においては「水」に配当されていることがわかる。この「水が土によって吸収・確保される」というプロセスは、五行相克に基づくものである。なお、このような「土」の働きを果たす物質の名称としては、先の「黄芽」「真鉛」に加えて、次の「黄輿」も挙げる事ができる。

金母はまず太陽の精氣(≡木)によって蒸されることで、「内に」液体(≡水)をなみなみと生じ、その後凝固する。これを「黄輿」(≡土)と呼ぶ。周星・陰陽・五行はその功を充分に為し遂げた後、位を退いてその姿を隠し、その成果を全て中宮・黄帝たる土徳へと帰すのだ。

(金母始因太陽精氣伏蒸、遂能滋液、而後凝結。是名黃輿焉。以至周星陰陽五行功考互滿、退位藏形、尽帰功於中宮黃帝土徳也。)

〔通真義〕三七章注)

また、「土」は、「水」を確保するのみならず、木火金水の四者による様々な生成変化を締めくくるといふ、煉丹の最終段階としての役割をも与えられている。

陰陽を巡らせてその精を採取し、五たる土によってその功を締めくくれば、四季による成果が結実する。青・赤・白・黒(≡木・

火・金・水)を循環させることができれば、これらは全て戊己(≡土)に受け継がれるわけである。……故に煉丹を修める際には、日月の精華を採取し、陰陽の靈氣を合し、その上で周星の巡りが満了し、陰陽の運行が完了して「時期が満ちれば」、全ての功が土徳に帰して、神精が備わることになるのだ。

(運陰陽而採精、以五土而終功、以四季而結裏。遂得青赤白黒循環、而皆裏戊己也。……故修丹採日月之精華、合陰陽之靈氣、周星數滿、陰陽運終、尽帰功於土徳而神精備矣。)

〔通真義〕九章注)

土徳は四季の末に遊び、龍虎金木の形質を生み出す。

(復有土徳巡遊四季之末、生成龍虎金木之形。)

〔通真義〕四四章注)

(3) その煉丹理論の全体像

以上の考察を通じて、彭曉の煉丹理論の全体像を或る程度明らかにすることができた。五行の変化に着目してこれをまとめれば、その構造は以下の通りである。

①水(≡黒鉛)は、五行顛倒に基づき、金(≡金胎・白虎)へと変化する。

②火は、同じく五行顛倒に基づき、木(≡青龍)へと変化する。

③金の内部へ木が入り込むことで、木と金の交合(≡龍虎交媾)が

行われる。

④交合の結果、金は五行相生に基づき、自身の内部に水（＝真汞）という子を宿す。

⑤金は、土（＝真鉛・黄輿・黄芽）へと変化することで、五行相克に基づいて自身の内部の水を吸収・固体化し、丹薬が完成する。この五段階を経て、木・火・金・水は土へと結集し、完成した丹薬には五行全てが備わることになるのである。

おわりに

最後に、彭曉は先の五段階の煉丹理論のどの部分に最も力点を置いているのか、考えてみたい。先ほど、彭曉が自身の目指す丹薬を「還丹⁽¹⁹⁾」と呼称していることを指摘した。その理由について、彼は次のように述べている。

水から金が産まれるので、水は金の母である。さらに金から水が産まれるので、金は再び水の母となる。還丹という名称の所以である。

（且金生於水、水為金母。水復生於金、金返為水母。故有還丹之号。）

〔通真義〕四〇章注）

ここからは、水から始まり、五行顛倒と五行相生を経て再び水に帰する循環変化こそが、彭曉が自らの丹薬を「還丹」と呼称する所以であることがわかる。彼はまた次のように述べる。

白金は水から産まれるが、「この金が」神器（＝神胎）となった後でも、水は絶えることがない。つまり、金・水の二つこそが道の枢紐なのである。水の数は一であり、天地・陰陽・五行・万物の始祖である。

（白金自水而産、及為神器、水体不絶。乃金水両情、為道枢紐也。水数一、為天地陰陽五行万物之始也。）

〔通真義〕一三章注）

ここでも彭曉は「水↓金↓水」という循環構造を挙げ、金水の二つこそが「道の枢紐」であると強調している。実際の所、『通真義』全体を通覧してみると、「火↓木」のプロセス（五段階における②）よりも、「水↓金↓水」のプロセス（同①・④）に関する記述の方が圧倒的に多い。すなわち、五行という観点から見れば、五行顛倒によって実現された金水の循環構造、つまり前掲の五段階における①・④こそが、彼の理論の核心であろう。

一方、鉛・汞という観点から見れば、鉛は、丹薬の材料の片割れであると同時に、真汞を産出・保持・養育する母胎でもあり、いわば煉丹が行われる「場」としての機能を備えている。彭曉における鉛は、万物生成の基点となる、「道」に等しい存在であったが、これに対して、汞はあくまで客体的なものである。つまり、鉛と汞はペアになって丹薬を完成させるという点では同等の地位にあるものの、理論全体を見渡してみれば、中心的な役割を果たしているのは常に「鉛」の方なのである。

前述した通り、『参同契』を初めとする煉丹文献においては、基本的に「鉛⇨虎」「汞⇨龍」という対応が一般的である。しかし、『金鑰匙』を構成する二篇、すなわち「黒鉛水虎論」と「紅鉛火龍訣」という篇名においては、明らかにこの対応が無視されており、虎のみならず龍も、鉛と結びつけられているように見える。つまり、彭曉はやはり「鉛」を生成論の頂点に据えており、その「鉛一元論」もも形容できる世界観においては、汞でさえもあくまで鉛の一面面に過ぎない存在なのであろう。

以上、五行と鉛汞、二つの観点から考えると、彭曉の「還丹」においては、五行を「水↓金↓水」と循環させる「鉛」こそがその理論の核心となっている、と結論できる。

なお、最後に一つ付言すると、彭曉における青龍・白虎の働きは、ヒトの生殖における父母の役割を連想させるものである。彭曉自身もこのことを意識しているようで、彼は次のように述べている。

乾坤をその枢軸とし、坎離を用いて生成すれば、十ヶ月で「丹薬が」完全になる。人間の場合と同じく、「十ヶ月で」四肢五臓、骨肉が全て備わるのである。

(若し乾坤枢軸、坎離生成、十月具形。与人无異、四肢五臓、骨肉俱全。)

〔通真義〕六十四章注

このように、丹薬の作成に必要とされる「十ヶ月」という期間は、同時に、女性が妊娠から出産に至るまでの期間であって、彭曉は丹薬と胎児のイメージを強く結びつけているのである。⁽²⁰⁾ 白虎の異称で

あった「金胎」「金母」「神胎」や、龍虎「交媾」によって生じる真汞の異称であった「靈汞真人」という表現は、これを明確に裏付けている。このような視点から再び総括すれば、彭曉の煉丹は、父(⇨青龍・汞)よりも母(⇨白虎・鉛)の役割を重視すると同時に、母子間の緊密な繋がり(水↓金↓水)をその核心とする、母系偏重の理論であるとも言えよう。

注

(1) HY九九九。なお、『通真義』の附録である『周易参同契鼎器歌明鏡圖』(HY一〇〇〇)は、道藏においては『通真義』から独立して収録されているが、『通真義』序文によれば、これらは本来は「まとまりの書物であったようである。そこで本稿では、これらをまとめて『通真義』と呼称している。なお、『通真義』のテキストは、宮内庁書陵部蔵・正統道藏本(正統十年刊行本)を用いた。これは、今井宇三郎「周易参同契分章通真義校本」(『東京教育大学文学部紀要』第十一集、一九六六年、所収)が、底本として用いているものである。その引用に際しては便宜上、『通真義』〇〇章注のように、『通真義』における章数を示した。

(2) HY一〇二六『雲笈七籤』卷七〇「内丹訣法」所収。「黒鉛水虎論」「紅鉛火龍訣」の二篇から成る比較的短い著作である。その引用に際しては、篇名のみを示した。

(3) 古くから『通真義』は現存最古の『参同契』注釈とされてきたが、近年陳国符氏によって、道藏所収の二つの『参同契』注釈が『通真義』に先立つ唐代成書であるという指摘がなされた。詳しくは陳国符「道藏経中外丹黄白法経訣出世朝代考」(『中国科技史探索』所収、上海古籍出版社、一九八九年)三五二―三五三頁を参照のこと。

(4) 欽偉剛「朱熹と『参同契』テキスト」(『中国哲学研究』第一五号、二〇

〇〇年)。「通真義」後序には、孟蜀政政十年(九四七年)の自序が附されているが、氏によれば、その後、「郡齋読書志」(一一五一年成書)に著録されるまでの約二百年間、「通真義」はその流通の痕跡を殆ど残していない。この「郡齋読書志」は、四川転運使であった井憲孟が四川で買い集めた様々な本を晁公武へと譲り、晁公武がこれを整理して制作した目録である。つまり、「通真義」は成書後も四川の奥地に長く閉じ込められ、その刊本が外に伝わらなかつたが、井憲孟が四川にてこれを見出し、さらに晁公武がこれを「郡齋読書志」で著録・紹介したことで、ようやく世に出回り始めたと考えられるという。

(5) 丁貽庄「唐末五代内丹術的由来和發展、彭曉的生平及其内丹思想」(卿希泰主編『中国道教史』第二卷第六章第七節、四川人民出版社、一九九二年)。氏はここで、彭曉独特の「鉛」に対する定義(本稿で後述)や、象数易理論の応用による鼎内の時間の人工的加速といった、彭曉の煉丹理論における注目すべき特徴を数点挙げている。一方で、その理論全体の構造については全く分析が為されていない。

(6) HY九九四。南宋・王道による注・疏と南宋・周真一による奏札から成る代表的な『龍虎經』注釈である。淳熙十二年(一一八五)の王道自序あり。

(7) HY一四一。南宋・翁葆光による注、元・戴起宗による疏から成る代表的な『悟真篇』注釈である。翁葆光注には一一七三年の自序あり。

(8) 『龍虎經註疏』と『悟真篇註疏』の思想の共通点として、①超越的な存在として定義された「鉛」の重視、②日月・坎離・五行における各種「顛倒」の重視、の二つが挙げられる。本稿で後述するように、この二つの思想はおそらく彭曉によつて初めて提唱されたものであり、彼の煉丹理論の最も重要なポイントである。なお、翁葆光注の煉丹理論の構造と、その根幹に据えられている彭曉の思想、さらに彭曉と翁葆光を結ぶ師承の系譜については、拙稿『悟真篇註疏』翁葆光注の煉丹理論——彭曉における「先天の氣」を手がかりとして——(『東方宗教』第一一九号、二〇一二年)を

参照のこと。

(9) 前掲欽偉剛論文、七、十頁を参照のこと。

(10) 前掲今井校本を参照のこと。この校本は、道藏本『通真義』を底本として、これをその他十二本の各種『參同契』注釈と校勘しており、各注釈間の『參同契』本文を比較する際に非常に有用である。

(11) 本節で述べる「鉛」の性格については、前掲丁貽庄論文、五二四―五二七頁に詳しい。

(12) 彭曉は自身の煉丹理論、またはこれに依つて作成した丹薬を、「還丹」と呼称する。その理由については後述する。

(13) この「太白真人歌」は、一般には唐・金竹坡『大丹鉛汞論』(HY九二二)がその初出であるとされているが、この文献には北宋成書の『悟真篇』が引用されており、唐代成立とは見なしがたい。

(14) 坎離の中爻こそが坎離自体の性質を規定しているという思想は、『易』繫辭下傳の「陽卦多陰、陰卦多陽」という記述に基づくものであろう。八卦においては、陰爻が多く陽爻が少ない卦(一陽二陰)は「陽卦」と呼ばれる。一方、陽爻が多く陰爻が少ない卦(一陰二陽)は「陰卦」と呼ばれる。これは、集団の中では少数が多数を支配・規定するものである、という思想に基づいた定義である。

(15) 坎離(日月)の本質たる中爻同士を交合させるという思想は、『悟真篇』にも見出せる。このことは、今井宇三郎『悟真篇の成書と思想』(『東方宗教』第一九号、一九六二年)に詳しい。

(16) 坎離を媒介として陰陽と五行を関連づける思想は、やはり『悟真篇』にも見出せる。吾妻重二『悟真篇』の内丹思想(『宋代思想の研究』所収、関西大学出版部、二〇〇九年、初出は一九八八年)は、前掲一九六二今井論文を承けて、このことを指摘している。

(17) 「坎為水、……為月。……離為火、為日。」(『易』説卦傳)

(18) 前述の通り、『悟真篇』注釈者である翁葆光と戴起宗は、その『悟真篇註疏』において、しばしば彭曉の著作を引きつつ、坎離・日月・五行を絡

めた顛倒の重要性を説いており、彼らがこの思想を彭暁に帰していることが窺える。『悟真篇註疏』（道藏本 卷二・七言四韻第九首の戴起宗疏や、卷四・絶句第四首の戴起宗疏、さらに同卷・絶句第六首の翁葆光注・戴起宗疏を参照のこと。

(19) 「還丹」という術語自体の起源は、彭暁からかなり遡る。例えば『抱朴子』卷四・金丹においては、至高の丹として「九丹」（九種の丹）が挙げられており、その第四丹が「還丹」である。また、初唐成書と思われる『黄帝九鼎神丹經訣』も同じく九種の丹とその作成法を解説しており、ここでも第四丹として「還丹」が挙げられている。これらの「還丹」は、服用することによって昇仙できるほか、塗り薬として用いれば魔除けの効果を発揮するものであり、彭暁とは異なり極めて具体的な作成方法が述べられていることが特徴である。

(20) 念のため付言しておく、丹薬と胎児を同一視する発想は、決して彭暁独自のものではない。「胎」の概念と各種養生法との密接な関係については、加藤千恵『不老不死の身体——道教と「胎」の思想——』（大修館書店あじあブックス、二〇〇二年）に詳しい。

